

# 漢魏洛陽城

## —北魏宮城西南隅の発掘調査—

### 1 はじめに

奈良文化財研究所は、中国社会科学院考古研究所と2007年度より漢魏洛陽城の共同発掘調査を5カ年計画でおこなっている。2010年度は計画4年目にあたる。

2010年度春期(4~6月)は3号門東西の調査、秋期(10~12月)は3号門の断ち割り調査および宮城西南隅の調査を実施した。2011年度には、宮城西南隅の補足断ち割り調査を残すものの、2008・2009・2010年度の3カ年の発掘調査によって、本共同調査の平面発掘調査はほぼ終了した。以下では、発掘を踏まえた宮城構造についてまとめるとともに、2010年度調査の概要を報告する。

### 2 北魏宮城中枢部の構造

漢魏洛陽城の宮城構造に関しては、ボーリング調査の成果によっておよその平面構造が把握されている(図7)。中国の古代建築は、基礎地業に版築をともなうため、ボーリング調査は非常に有効な調査方法である。この成果に基づいて宮城中枢部の様相をあきらかにすべく、発掘調査をおこなっている。社会科学院によって名称が付され、主要な調査対象となっている遺構が以下である。

- 1号建築遺構(1号門・閶闔門)
- 2号建築遺構(2号門)
- 3号建築遺構(3号門)
- 4号建築遺構(太極殿)
- 5号建築遺構(宮城西南隅)

北魏宮城の中心軸は西側に偏っており、宮城正門が1号門である。門前左右に門闕を完備する大型殿堂式の門と判明している。1号門の北側に位置するのが2号門で、1号門と同規格の門である。さらに、2号門の北側に位置するのが3号門である。3号門は、北魏以降と思われる大規模な版築で北側が改造されていて、特異な存在である。また、基壇上では東西に長い大型建物の痕跡を確認しており、1・2号門とは様相が異なる。しかし、1号門の発掘によって宮城創建が魏晋期まで遡る可能性が指摘されている点からすると、1・2・3号門は本来、

同規格の門だった可能性もある。3基の門の構造比較は、報告書作成に向けての重要課題である。

この3基の門の北側、3号門から約200mの距離にある巨大な基壇が太極殿である。さらに北の基壇(昭陽殿)とあわせてこの合計5基の基壇が、宮城の中心軸を構成する建物群である。3基の門、太極殿、後殿が一直線に並ぶ、それが漢魏洛陽城・北魏宮城中枢部の基本構造である。

### 3 宮城3号門の発掘調査

3号門については、2009年度に合計1800㎡の全面発掘をおこなっている。しかし、東西に続く版築の構造がわからなかったため、2010年度には東西合計1000㎡の発掘と基壇本体の断ち割り調査をおこなった。

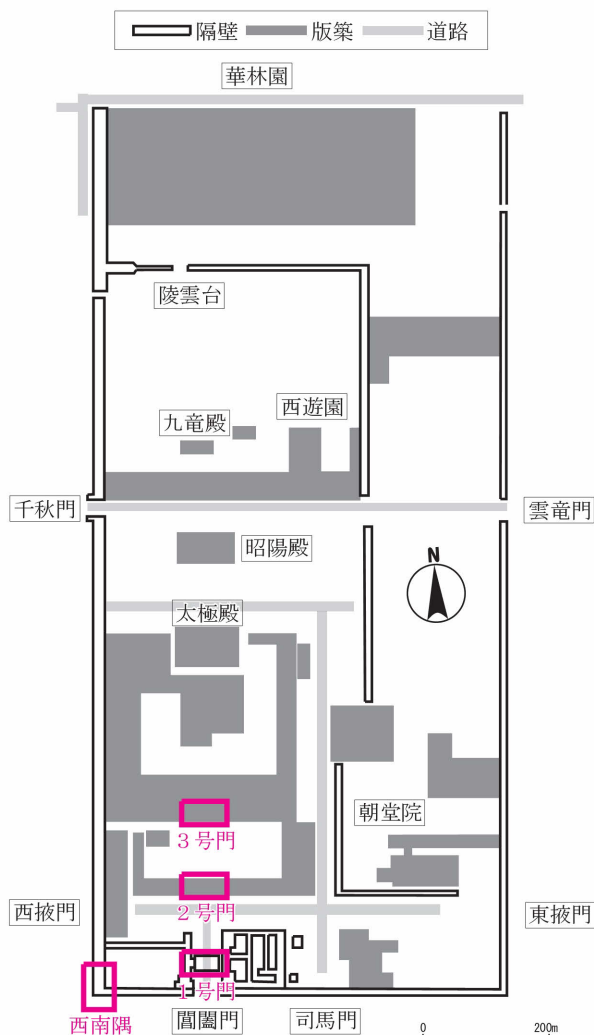


図7 北魏宮城の構造と調査地 1:12000



図8 3号門の全景（北東から）



図9 3号門断ち割りトレンチ（東から）



図10 宮城西南隅の全景（北西から）



図11 宮城西南隅西側の建物遺構（西から）

3号門は東西36m、南北8.6mの基壇が中央にあり、短い連結部を経て北東・北西に城壁版築が続いていく点がわかっていた（図8）。2010年度の発掘では、東西城壁が南北幅11.4mで東西に展開することが判明した。城壁版築上面には、やはり門基壇と同じく建物の存在を示す赤版築も検出した。

さらに、門基壇の断ち割り調査では、門本体の版築が現遺構面から1.2mの深さまで総地業され、その上から建物に関する赤版築が掘り込んでいることがわかった。特に、基壇中央の4つの赤版築の掘り込み地業底面からは、礎石大の赤石が検出された（図9）。これは隋唐期に認められる工法であり、その直上に本来は礎石が存在していたことがわかる。

#### 4 宮城西南隅の発掘調査

宮城西南隅に関しては、2010年度秋期に1800㎡の平面発掘をおこなった。しかし、断ち割り調査が2011年度に実施予定のため、ここでは概要を簡単に述べる。

まず、基本的にボーリング調査で想定した通りの場所で、宮城の西城壁、西南隅、南城壁の版築を確認した（図10）。ただし、城壁は何度も修築されているため、現状ではもっとも新しい時期の版築範囲を確認しているだけである。西城壁は幅2.5m～4.5m、南城壁は幅6.5～7m

と、南城壁のほうが幅広である。また南城壁の南側には、1号門の南で検出した東西道路の路面の続きも確認できた。

西南隅部分には、東西13m、南北15mほどの大きな版築を検出しており、角楼の存在が予想される。さらに城壁外である西側では、版築をとまなわない埴積み遺構（図11）を確認しているが、年代は定かではない。

いずれにしても、宮城西南隅は断ち割り調査によって、その構造が明らかになると予想される。

#### 5 おわりに

ボーリング調査と現在までの共同発掘の成果を踏まえた上で、宮城構造についてまとめ、さらに2010年度の発掘成果の概要も示した。奈良文化財研究所と社会科学院考古研究所の国際共同調査によって、漢魏洛陽城・北魏宮城中枢部の様相があきらかになりつつある。発掘調査はほぼ完了し、2011年度からは、調査図面・遺物の整理など報告書作成に向けた準備を進める予定である。

漢魏洛陽城は、史上初の太極殿の造営や外郭城の整備など、隋唐都城の直接の祖形となった都城である。さらに、日本古代都城の源流を探る上でも非常に重要な位置を占める。今後の報告書作成作業によって、分析を深めていきたい。

（城倉正祥／早稲田大学 文学学術院）